

Title	<翻訳> Ardha Kathānaka (Ardha Kathā) : Ṭippaṇī : バナーラシーダーサ半生記抄(訳註)上
Author(s)	古賀, 勝郎
Citation	大阪外国語大学学報. 24 p.13-p.26
Issue Date	1971-03-30
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80396
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

Ardha Kathānaka (Ardha Kathā): Tīppanī

バナールシーダーサ半生記抄（訳註）上

古 賀 勝 郎

ブラブ^主(¹)を念じ、^{まこと}信愛を捧げ、パーサ(²)、スパーサ(³)に帰命頂礼。⁽¹⁾

バルナー川とアシー川(⁴)のガンジス川への合流地たるバナールサは、カシワールの中央に位置する都ゆえカーシーとも申します。ところがここはまた、スパーサ、パーサ両救世者の御誕生地であるばかりか、^{シヴァ・マールダ}両祖が解脱道を示されたのもこの地であったゆえ、この都には解脱都との別名もあるような次第。かようなわけでバナールサにはさまざまな呼び名があり、この他にも様々の由来が説かれておりますが、いずれも不確かな話ばかり。⁽²⁾ さて、かく申すやつがれは、ジャイナ教にては名も高きシュリーマール姓を名乗り名をパールシュヴァナータの御誕生地バナールシーに因んでバラールシーダーサと申す男。⁽³⁾ ここにわが身の過ぎ来しかたをふりかえり、見たまま聞いたまま、あるいは、おのれの手柄話や失敗談の数々を語ってみようとの所存にてございます。⁽⁴⁾ かように申しますのも、人にしてまだ見ぬ先々のことどもを知悉しているのは賢人・聖人に限られたこと、凡庸の身にあってはとうていなしえぬところにございますれば。⁽⁵⁾ されば、おのれの身に過ぎ去りしことどもをかいつまみ、これまで内緒にしまいおいたことまでも^{マディヤ・デーシャ}中部地方の言葉⁽⁵⁾で語ってみようとの趣向。しばしお耳を。⁽⁷⁾

さて、わが佳き国・パーラタは中部地方のローフタガの近郷に所在するビーホーリー村⁽⁸⁾に住むテージプートは、その昔、^{グル}師の教えを受けて業果のなりわいを捨ててジャイナ教の道に入り、⁽⁹⁾ ナモーカーラ・マントラの数珠を⁽⁹⁾授けられると、シュリーマール姓とビーホーリヤー・ゴートラを⁽⁷⁾名乗り始めたと申します。⁽¹⁰⁾ 語れば長い系譜になりましょうが、その昔、ローフタガのガンガー、ゴーサラの一族に⁽¹¹⁾、バスターこと、パストゥパーラが生まれ、その名を謳われましたが、その子にジェートゥーこと、ジェータマラ、ジェータマラの子はジナダーサと申しました。⁽¹²⁾ このジナダーサーの長子が頭の冴えたムーラダーサで、ヒンダギー語やペルシア語⁽⁸⁾を学びました。力にも運にも恵まれて⁽¹³⁾ 商いをするうちにムガル⁽⁹⁾の將軍^{モーディー}の穀物御用達⁽¹⁰⁾を仰せつかり、マールワールの国へ移り住みました。⁽¹⁴⁾ マールワールは雅趣に富む所でございますが、その地のナルワルという風光明媚な都は、ヒマーウーン王⁽¹¹⁾に仕える將軍が^{ジャギー}賜与地としていただいております。⁽¹⁵⁾ ムーラダーサは將軍の御愛顧を受け仮勘定の商い⁽¹²⁾をしておりました。ヴィクラマ紀元も1600年を過ぎて8年目のこと、⁽¹⁶⁾、サーワン月の白半5日、月曜日にムーラダーサは息子を授ったものですから、盛大なお祝いをしてカラガセーナと名づけました。⁽¹⁷⁾ 平穩無事に年月は流れ、2年後に次男が生まれました。その児にはガナマラと名づけました。ところが、風に吹きやられる雲の如くガナマラは^{カーラ}死神の風に

吹きやられ、3歳にしてこの世を去りました。(18) 若木に先立たれるならば、親木も悲しみのあまり枯れ果てるというもの。(19) わが児の死を悼むあまりムーラダーサもうちしおれ、子の後を追ひ、ついに父子ともに不帰の客となったのは、ヴィクラマ紀元の1613年のことと申します。(20) 祖母が幼な児をかかえて悲嘆にうちくれているところへ、いずこでやらそれをすっかり耳にしたムガルが(21) 急ぎやってきて、すぐさま家財に封印をし、財産をみな差押え没収してしまいました。(13) (22) あわれな母子は塗炭の苦しみに耐えながら東へと旅したのでございます。(23) ジャウナプラ(14)という都は、ゴーマティー川の岸边にあるうるわしいところ。風流人なら思わず一句詠もうというほどの清らかな流れ。(24) 深みをたたえ、うねうねと流れるその岸边の風光は遠くひろがる平野とともに人の目をたのしませてくれます。ここはパターン族のジャウナーシャー(15)が拓いて王宮をさだめ君臨されたために寒村がこのように大きな都にまでなったという次第。(25-27) ^{ヴァルナ}四姓すべてこの都に住み、下には36のパウニー、(16) 上にはブラーフマン、クシャトリヤ、ヴァイシュヤが多数暮らしております。(28) シュードラには次のものを数えます。①ガラス ^{シースガル}細工師、②仕立屋、③パーン売り、④染物屋、⑤牛飼、⑥木工、^{サンガトラス}⑦石工、⑧酒屋、⑨洗濯屋、⑩棉屋、⑪菓子屋、⑫カハール(水汲み、かごかき)、⑬カーチー(野菜作り)、⑭酒屋、⑮陶工、⑯庭師、⑰帖打ち、⑱紙屋、⑲百姓、⑳織工、㉑絵師、㉒玉細工師、^{バーリー}㉓[木の葉の]食器づくり、㉔漆細工師、㉕真鍮紅工師、㉖煉瓦工、㉗絹織物師、㉘屋根ふき人夫、㉙床屋、^{パールズニ}㉚穀穀屋、^{スナール}㉛金細工師、^{ルハール}㉜鍛冶屋、^{シクリーガル}㉝研ぎ屋、^{ハローイーガル}㉞花火師、^{ダイワール}㉟漁師、^{チャマール}㊱革屋、以上あわせて36になります。(29) ジャウナプラを都として王位についた王は9人あり、順を追って名をあげてみますと、(17) はじめがジャウナーシャー、次がパワツカルシャー、3代目がスルハル・スルターン、4代目がドース・ムハンマド、5代目がシャーニザーム、6代目がイブラーヒームシャー、7代目がシャーフセイン、8代目がガージ、9代目がバキヤスルターン。(32-34) このように9代の王が続いたのですが、その御威光は、300年の長きにわたり、東はパトナー、西はイターワー(18)、南はヴィンドヤ山脈、北はガーガラー川に至る広大な地域に及びました。(35-36) これみな先祖から伝え聞いたことをそのままお話し致したまでのこと、誤っていてもおとがめなきように願います。(37)

さて、これまでは昔のこと、話は戻ってヴィクラマ紀元の1600年から数えて13年目。(38) マダナシング・シュリーマールは、ジャウナプラに住むジャイナ教徒で、チナーリヤ・ゴートラの宝石商。(39) 祖母は私の父カラガセーナを連れて業果のもとにたずね求めて故郷のマダナシングの家へ辿りつきました。(40) マダナシングはカラガセーナの母方の祖父チャジマラの兄(大伯父)にあたるわけですが、姪とその子とをやさしくいたわってくれました。(41) 祖母が問われるままに夫と子の死後、ムガルの將軍に家財をみな奪われた次第を話しますと、マダナシングは涙のうちに、「息子一人あればまたどうにかなろうものよ。悲しみにくれるではない。苦あれば楽ありじゃ」と慰め元気づけてくれました。(42-44) 「この家をわが家と思うがよい。気がねや遠慮はいらぬ」といたわられているうちに3年の月日は事もなく過ぎ去りました。(44~

父は8歳になるとチャタサーラへ⁽¹⁹⁾通い始め、学業を修めました。家では証文書きや帳簿つけを教わり、かたわら宝石の鑑定も習いました。^(46~47) 4年後、父は職を求めて家を後にしました。東はベンガルの国に、パターン族のスレーマーン・スルターン⁽²⁰⁾がいましたが、⁽⁴⁸⁾ その義弟にあたるローディーカーンをわが子同様にしておりました。シュリーマールのダンナー・ラーエがそのローディーカーンの^{ディークーン}財務官をしており、世間にも名を知られておりました。⁽⁴⁹⁾ その配下には、シュリーマールのシンガラ・ゴートラの者が500人、業果に従い、すべて収入役⁽²¹⁾^{ゴートダール}として仕えておりました。⁽⁵⁰⁾ ダンナー・ラーエは、勘定もせず弁済証文⁽²²⁾を書き与えるほど信仰にあつく、心のひろい方で、ポーシャダの戒⁽²³⁾を守り、朝夕、パリコーナーにつとめ、業を重ねまいとする強い意志の人でありました。⁽⁵¹⁾ 父のカラガセーナはこのダンナーラーエの噂を聞くと、母には相談したものの大伯父には告げもせず、母が与えたわずかの路銀をふところにして、早朝、馬に乗って家を後にしたのでございます。^(52~53) カラガセーナが身の上を打ち明けますと、ダンナー・ラーエは大いに激励して下さり、父のことを心に留めておいて下さいました。⁽⁵⁴⁾ ある日、ダンナー・ラーエは思案のあと、カラガセーナを4つのパルガナーの^{カールカン}ポートダールにとりたて、さらに勘定方を2人配下にして下さいましたので、カラガセーナは任地に赴きました。^(55~56) 仕事というのは、とりたてた税をダンナー・ラーエとローディーカーンのもとへとどけることでした。かくして6、7ヶ月も経った頃、カラガセーナは、ダンナー・ラーエがスルターンの許可を得て募ったサメータ・シカラ詣⁽²⁴⁾の講⁽²⁵⁾に加わりました。^(57~59) 祈禱をすませて宿所の天幕へ戻り、ダンナー・ラーエはいつものようにサーマイカ⁽²⁶⁾を済ませました。^(58~59) ところが、チャウビハール⁽²⁷⁾や黙行のあと、パンチャナヴァカーラ⁽²⁸⁾を唱えている最中に俄に生じた腹の痛みは劇痛となり、苦悶するうちにやがてそのまま一言も発せずに息をおひきとりになったのでした。新しい生命をうけたがために古い身はくずれおちたというわけでもございました。^(60~61) 善根のなせるところ従者をひきつれ、象、馬、車を従え、栄華を極め、一族を興しながらも最後にはただ独り、疲れ果てた苦力のように身の重荷を投げ出すと、塀のむこうにおかぐれになったのでした。⁽⁶²⁾ ダンナー・ラーエの急逝に村々に騒動が起こったと聞いたカラガセーナはすぐさま折角得た仕事もうち捨て家に逃げ帰りました。⁽⁶³⁾ 貧しい身なりをしてはじめて通る悪路⁽²⁹⁾を頼りに山から川へ、森から村へと歩きに歩き、ジャウナプラのわが家へ辿りついたのは夜半のことでした。大伯父をはじめ家族に挨拶をすませると、大切にしまってきたいくばくかのお金を母親に手渡したのでございました。^(64~65)

そうこうしているうちに4年の月日が流れ、カラガセーナが18歳になった時と申しますからヴィクラマ紀元の1662年のことでございます。カラガセーナは、今度は西方に向かって家を出ました。⁽⁶⁶⁾ アーグラでサラヒー⁽³⁰⁾と宝石の商いをしていた叔父のスンドラダーサを頼ってのことでした。⁽⁶⁷⁾ 叔父はなにかといたわってくれ、仕事も一緒にしてくれました。それに商い上手で物惜しみしない方でしたので、二人は世間から実の親子のようだとされるほどでした。こうして4年たち、カラガセーナはメーラタ⁽³¹⁾のスーラダーサ・シュリーマール・ドール

という方の娘を嫁にもらうことになり、挙式のためメーラタへ行きました。式を済ませてアークラーへ戻ると、また市場に出て商いをし、金も貯めたのですが、叔母との折合いがよくなかったため、夫婦別の家へ引き移りました。それから2、3年のうちに叔父も叔母も、家や財産をみな遺したまま他界してしまいました。(68~70)

ヴィクラマ紀元の1633年に馬1頭に車1台、使用人数多、それにかかなりの金子をたずさえてジャウナプラへ戻りましたが、道中には10日を要しました。すぐさま街に仲間と一緒に店を開き、商いの準備にとりかかりました。(73~74) アガルワラーに属するシヴァ派の信徒で、富裕な商人ラーマダーサが、利のあることならと片棒をかつぐことになりました。サラヒー、貴金属、真珠などの商いも二人が互いに信じ合い、協力したものですから順調にまいりました。(75~76) 1635年(1578 A. D.)には、カラガセーナは男児を授かり盛大な祝いをしたのですが、その児は10日目に息絶えてしまったものですから悲しいおもいをしたことでした。(77) Vi. 1637年にローフタガのサティー詣⁽³²⁾に出かけたところ、道中で追剥ぎに出くわして丸裸にされました。(78) 残ったものといえば、着ていた着物と夫婦の生命ということではうほうの態で家に戻ったような次第でした。息子を授かるように願かけに出かけたというのにサティー・アウータはこのような果をお授け下さったわけです。(79) それでもなお、そのサティーの御威力のまやかしを見破れず、父母は再度願かけ詣を思い立ちました。わが目でその空しさをはっきりと見ながらも悟りえぬ、煩惱にとらわれた姿とはまさにこのことをいうのでございましょう。(80) Vi. 1643年のマーガ月の白半の11日、日曜日、ローヒニーの雄牛座の第三星の刻にカラガセーナの家では男児の出生をみましたので、名をヴィクラマジータとつけました。なにしろ、願をかけて8年目に、それも男児を授かったものですから、それは盛大なお祝いを致しました。女たちが祝い歌をたからかに歌うかたわらでは、惜しみなく喜捨もなされました。(83~85) 6、7ヶ月後に家族そろってパールシュヴァナータ詣に出かけ、お定まりのお祈りを捧げました。(86) 子供を前にさしだして拝んでおりますと、番^{ブジャーリー}僧が両手をあわせて、「パールシュヴァナータの御足に頂礼。この児にどうか長寿をお授け下さいますように、足下にひれ伏しお願い申し上げます」と申しました。(87~88) ブジャーリーは次に制息の行をなし、まやかしの瞑想に入り、半時間ほど無言を続けた後振り向いて告げました。(89) 「瞑想の中で現じたことを聞かせてつかわそう。パールシュヴァナータのヤクシャ⁽³³⁾さまが姿を現わし仰せられるには、心を労するには及ばぬということじゃ。この児にはパールシュヴァナータの御誕生地に因んだ名をつけるがよかろう。そうすれば長寿を授かるとのことじゃ。」これを聞くとカラガセーナはじめ家族一同安堵したようなわけでした。(90~92) そこで「パールシュヴァナータ・スパールシュヴァナータ両救世者は、バナラサにお生まれになったゆえ、この子の名はバナラシーダーサとつけるがよかろう」ということになり、一同はジャウナプラへ戻ったのでございました。(93) Vi. 1650年にはバナラシーダーサは痘瘡にかかりましたが、これもやがておさまリ、元気になりました。この年にはこれまた前世の因縁があつてのこと、妹が生まれたのでございました。(96~97)

私は8歳になりますとチャタサーラへ通いはじめ、パンデー師に読み書き、算術を習いました。

(98) 1年間通ったのですが、日一日と知恵も増し、利発になりました。Vi. 1652年こと、父はやはり宝石商をしており、私は9歳になっておりました。(99~100) カイラーバーダ⁽³⁴⁾に住むターンビー・パルヴァタの子カルヤーナマラには娘がございました。(101) 同家の^{ブローヒト}祭司^{ナウー}(35)が、床屋⁽³⁶⁾を従え、カルヤーナマラの手紙を父のもとへ携えてきました。(102) 父はその娘と私との婚約を取決め、仮祝言のしるしに私の額にティラカ⁽³⁷⁾をつけてくれました。本祝言は二年後に挙げることになりました。(103) 仮祝言が今申しましたように1652年(1595年A.D.)でしたが、その翌年には饑饉⁽³⁸⁾が起り、物価は途方もなく上がり、食物さえ手に入らず、世間は悲惨なありさまとなりました。(104) Vi. 1654年にはともかく饑饉が終わりましたので、マーガの月の白半の12日に挙式のため私はカイラーバードへ行きました。(105) 式をすませて家に戻ったその日に、二人目の妹が生まれましたが、なんと、同じその日に母方の祖母が亡くなりました。(106) 父にしてみれば、姑の死と娘の誕生、それに息子の結婚式とを一度に迎えたわけで、この世はまことに不可思議といえど不思議でございませぬ。賢者はそれを苦とみて俗世を厭うのですが、愚者にはその謎がわかつてもございませぬ。(107~108) こうして2ヶ月が過ぎますと、私の妻の叔父ターラーチャンダ・シュリーマールが訪れ、妻をカイラーバードの親許へ連れて行きました。(39) (109)

ところで、ジャウナプラではとんだ災難で、ひどい有様になりました。と申しますのはジャウナプラの城主はナワブ・キリーチ・カーン⁽⁴⁰⁾でございましたが、街中の宝石商をみな捕えて獄に入れ、その釈放については大枚を出せとの無理難題を吹っかけてまいりました。(110~111) ある日の朝早く、怒り狂ったナワブは、命を下して商人たちを盗人のように縛り上げて鞭で打ちたたかせ、半死半生にして釈放しました。(112~113) みな相談の結果、このまま命をおとすよりは家を捨て家族とともに逃げ出そうということになり、(114) 四方八方へ逃げ出したような次第でございました。父も家族をひきつれ、ガンジス川を渡り西方に逃げました。(115) サーヒザードプラ⁽⁴¹⁾への途中、カラーマーニクプルまで来ると、雨に降られて道はぬかるみとなりました。(116) 暗闇の上に雨足が激しいので旅籠^{サライ}に宿をとったものの、父は家族ともども貧者同然のおのが姿に涙を流したようなことでした。(117) 妻子4人を連れ、さらに大切な家財をかかえての道中。享くべき楽も前業が妨げとなってなにかも苦と化したのでございませう。(42) (118) ところが、その町の^{クニヤ}長^{クニヤ}のカラマチャンダ、マートゥラという商人が、自分は他所に引き移って自分の家を空け、夜の九時過ぎに父の名を呼びながらたずねてきて下さいました。(119~120) そして、「どうぞ御主人、馬をお召し下さい。ちょうど小屋が一つ空いておりますので、御遠慮なくお引き移り下さい」と親切な言葉をかけてくれました。父は大喜びで家族を連れてそこへ引き移りました。(121~122) 安堵してよく見れば、その家の構えは立派なもので水がめやつばが数多く置いてあり、寝具もそろっておりました。(123) また、一部屋は穀物などの食糧で満ち何一つ不自由のないようにしてありました。(124) 父はその方の足下にひれ伏し、この親切なもてなしに心からの礼を述べたことでした。(125) ナワブ・キリーチが与えた苦しみにひきかえ、サーヒザードプラではかようなもてなし。(127) 一見すれば天地の差と

申せましょうが、別の見方をすれば、苦を味った人のみ樂を享けるわけで、樂を味っておればこそ苦をみることになるというもの。(128) 樂を得れば喜び浮かれ、苦にあれば嘆き悲しむのも、凡愚の眼には苦と樂とが互いに別のものと映るためですが、(129)、知者は幸運と不運に、あたかも昇る日、沈む日に対するように接するのでございます。あるいはまた、それを光明と闇の如く互いに連れ添うものと見るものでございます。(130)

父はこうしてサーヒザーダプラに10ヶ月を過ごした後、プラヤーガへ赴きました。(132) プラヤーガはガンジス川とヤムナー川の合流点の近くにあり、イラーハーバーサ⁽⁴³⁾とも申しませんが、ここには地上の^{インドラ}大神であらせられるアクバル王の皇太子ダーニーシャーがおられました。(44) (133) 父がイラーハーバーサへ出かけた後、私は家に残り小商いを始めました。(134) わずかずつ貯め蓄えたものを祖母にさし出しましたところ、(135) 祖母はサティー・アウータの申し子をはじめて稼いだものということでお祝いの菓子を身に配りました。(136) サティー・アウータを信仰しておりました祖母は、孫の私をサティーから授った子供に違いないと思いついていたようなことでした。(137) サーヒザーダプラにはさらに3ヶ月、あわせて1年1ヶ月過ごしましたが、父からファテープラ⁽⁴⁵⁾に行くようにとの知らせがありましたので、(139) 駕籠を二挺、人夫を4人やとい、一家そろってファテープラへ引越しました。(140) その町には、オースワラ⁽⁴⁶⁾に属する^{フディヤートマ}神智派⁽⁴⁷⁾のバースーシャーの一族がかなり住んでおり、(141) バースーの子のバゴーティーダーサは自分の家を私どもに提供してくれました。私たち一家はそこを宿にして平穩無事な楽しい日々を過ごしておりました。そこへまた父の便りがあったものですから、私だけがイラーハーバーサへと向かいしました。(142~143) 父は宝石の商いのためダーニーシャーのもとへ出入りしておりました。(145) 辛いこと、悲しいことと目まぐるしく4ヶ月が過ぎると、また、ファテープラへ戻り、一家は同じ屋根の下で暮らすようになりました。(146) それから2ヶ月後、キリーチ・カーンがアーグラへ移ったと聞いたものですから、父は家族を連れて故郷のジャウナプラへ戻りました。宝石商たちは、地下にひそんでいたもののように、あちこちから再び姿を現わし、みな元通りの商いを始めましたが、それはVi.1656年のことでございました。(147~148) 1年が無事に過ぎた時のこと、アクバル王の長子サレーム王子⁽⁴⁸⁾が、コールフーバナへ狩りという触れてみで来られました。(49) ジャウナプラのジャールギールダールであったラグキリーチ・ヌーラム・スルターン⁽⁵⁰⁾はサレーム王子をコールフーバナへ行かせぬようにとのアクバル大王の命⁽⁵¹⁾を拝してジャウナプラの城を死守しようと決意したのでありました。(149~152) 道路は閉ざされ、ゴーマティー川は船も通らぬようになりました。橋や城門も閉ざされて、戦いの準備が進められました。(153) 歩兵・騎馬兵も数多く、四方八方に番兵が立ち、城の胸壁には砲門が並び、市内は騒然となりました。(154) 食糧、飲料水、衣服を貯えるかたわらでは、鎖かたびらや鞍、それに鉄砲や多量の弾薬、各種の武器が調達されました。(155) ヌーラム・スルターンはその準備にありたけの金を投じ、自ら戦陣に立ったほどでございます。民はあわてふためきあちこちへと逃げ去り、この大きな都も荒野のようになり、攻撃は今にも始まるかと思われるような様子でございました。宝石商は寄り集いはし

たものの、他には街に居残る者としてごさいません。(156~157) 一体どうすればよいのやら、家族を連れて困りはてておりました。街にとどまれば危うく、逃げ出したからとて安全だとは限りません。(158) そこで一同はヌーラム・スルターンのもとへ歎願に行きました。(159) 「おのれの命が危いのに、そちどもにかかずにわっておれるものか」との返事にみなは逃げおおせた者が勝ちということになり、それぞれ身寄りを求め、あるいはあてもなく四方八方に散り、道連れになる者としてごさいません。(160~161) 父はドゥールハサーフの行ったラチマナプラ近くへ逃れました。(162) そこはラチマナダーサという方が村長をしており、その方が堅く誓って森の中へかくまって下さいました。かくして6週間足らず過ごしますと、ジャウナプラは平穏なことが判明いたしました。(163) ヌーラムはラーラーベグ⁽⁵²⁾の術策により王子のもとへ連行されると平伏して詫びたので赦されたのでごさいました。(165) 事の次第を知ると、人々は安心し、恐ろしかったことも忘れてわが家に戻りました。(166)

私は14歳になりますと、デーヴァダッタ・パンディット⁽⁵³⁾のもとへいささかながら学問を修めに通い始めました。(168) 「ナーマ・マラー」⁽⁵⁴⁾二百句、「アネーカールタ」⁽⁵⁵⁾、それに占星学、修辞学、「ラグ・コーカ」その他に四百頌ほど習いました。(169) 学問に没頭していたところ、Vi.1657年に、家格式も世間体もあらばこそ、私は火遊びに現をぬかすことになりました。(170) そうこうしているうちに4ヶ月経ち、ひんやりした季節がめぐり来た頃、カラタラガッチャ⁽⁵⁶⁾のアバヤダルマ師が2人の弟子を連れておいでになりました。(173) ジャティー⁽⁵⁷⁾が来られたというので、門徒はみな説法をうかがいに寄り集うのでごさいました。(174) 私も先祖にならい、父と共に師の宿泊所^{ボーサーラ}⁽⁵⁸⁾を訪ねました。そこでバーヌチャンドラ・ムニ⁽⁵⁹⁾にお近づきを得たものですから、日中はボーサーラで過ごし、夜は家に戻るのを日課として(175)、ムニから書を学びました。『パンチャサンディ』を書写し、『ストートラヴィディスタヴァナ(沐浴灌頂儀規頌)』を読みました。(176) サマーイカ、パリコーナを行じ、『シュルタ・ボーダ』などの書を読み、八種の徳質⁽⁶⁰⁾を身につけようと励みました。(177) ところが、このように師の教えを思いうかべているかと思えば、次には色慾に迷うという有様でごさいました。こうした間に 対句^{ドゥハ}を一千句詠みましたが、(178) 九つの情調を詠みこんだものの意で、「ナヴァラサラチャナー」と題名をつけたようなことでした(179) このようなわけで、学問と色慾との両方に入りびたって食事もあるほどで、仕事は何一つ手につかぬ有様が2年間も続き、父母の戒めもどこ吹く風と聞き流しているうちにVi.1659年となりました。(180~181)

私は15歳10ヶ月になると妻を迎えに行くことになりました。⁽⁶¹⁾ (182) 衣類など身のまわりの品々をとり揃えさせ、駕籠をやとい使用人を従えて出発し、無事カイラバーダに着きました。(183) ひと月あまりそこに過ごすうち、冷たいポーシャ月の白半に、前業の果のため突然、風気の病⁽⁶²⁾に罹りました。(184) 全身が癩病に罹ったかのように、骨という骨は痛み、髪はおろか全身の毛が眉毛までも抜け落ちてしまい、(185) 無数の瘡が手といわず、足といわず全身に吹き出たため舅も義兄弟もだれ一人共に食事をとらず(186)、寄りつく人さえなくなりました。姑と妻とが介抱してくれはしたものの(187)、食物を口に入れ、膏薬を体に塗ってしまうと鼻をつま

んで早々に退散するような有様でございました。(188) この時、ある床屋^{ナ－イー}が薬を飲ませ塩を用いずに煮たひよこ豆を食べさせてくれました。ところが、この男は私が差し出す謝礼を一文も受け取ってはくれません。(189) こうして四ヶ月が過ぎた頃、痛みが少しとれましたが、快復したのはさらに二ヶ月後のことでありました。(190) 沐浴した後、床屋に御礼をして手を合わせ、「おまえはわしの友も同然」と申しますと(191)、床屋はとても喜んで家に戻って行きました。カイラーバーダでさらに十日間ほどの養生をして(192)、再び駕籠をやとってジャウナプラに戻りました。しかし、舅たちは娘を私に同行させませんでした。(193) 家に戻り父母に挨拶をしますと、母はわが子の毛が抜け落ちた鳥のような姿を見てひどく泣き悲しみ(194)、父は世間体をはじて私を罵りました。一瞬呆然としましたが、私も涙を流すばかりでございました。(195) それから二十日間ほどは家の中にふさぎこんでいたのですが、再びポーサーウ通いを始めますと、学問も火遊びも元通りということになりました。(196) そうこうしているうちに四ヶ月経ち、父はパートナーへ行き、私は再度、カイラーバーダの妻の実家へうかぬ顔をして行きました。(197) ひと月の間、市場へも出ず家にひきこもっていましたが、今度は駕籠一挺と馬一頭をやとい、妻を連れてジャウナプラへ戻りました。(198) 家に戻ると、家族をはじめ年寄りたちが有難い説教を聞かせてくれましたが、それをこちらが聞き入れるはずもございません。(199) 「バラモンや吟遊詩人^{バート}ならいざしらず、たかが市場に坐る商人の倅ではないか。あまり学問すれば乞食せにゃならぬ。年寄りのいうことじゃ、聞きわけてくれ」(200) などと、みなそれぞれ勝手な口をきいていたのですが、酔いしれているこちらには馬の耳に念仏という次第でした。

これがヴィクラマ暦の1660年のこと、ありのままを申したわけですが、その前年のサーワン月に一人のいやしいサンニャーシー⁽⁶³⁾が(209)、ひょっこりやって来て言うことには、「わしが教える呪文を怠らずに唱え(210)、一年の間、堅く信じて厠の中で繰り返し唱え、だれにもそのことを洩らさぬならば(211)、一年経ったその日から毎朝戸口に立ってみるがよい。金貨^{ディナール}を一枚ずつ手に入れよう。(212) 一年間そうした後に、また同じようにすれば、同じ果を得ることになろう。」これを聞いて、サンニャーシーは高德の人に違いあるまいと思い(213)、また、欲にもかられて私は、サンニャーシーの足下にひれ伏し教えを乞いました。するとサンニャーシーは呪文を紙に書いてくれ(214)、いずこへか立ち去りました。あさましくも私は、その一年間、呪文を唱えましたが、そのことはだれにも内密にしておきました。(215) 一年目の朝、戸口に出てあたりを見回してみたのですが、金貨^{ディナール}はいずこにも見当たりません。(216) 翌日も戸口に出て見ました。金貨は夢の中にも現われぬのに欲にかられて気はあせり、食事もおいしくいただけません。(217) そこでそのことをバーヌチャンドラ師におたずね致しますと、それは出鱈目の話であろうとの御言葉でございました。それでようやく目が覚め、心配もなくなり、食欲も甦ったというわけでございました。(218)

〔以上本文下段の()内の数字は句の番号を示す。上段のそれは次の註の番号を示す。なお、註に使用する略号については大阪外国語大学学報23号63—64ページを参照〕

註

〔1〕 Prabhu—この語はたとえば (90) に次のように用いられている。—prabhu pārāsa jīnavara kau jaccha—ことから, jina, すなわち, Mahāvira及び以前に現われた救世者 (Tirthamkara) 全体を指すものと考えてよからう。(1)

〔2〕 Pāsa—Pārs'vanāthaの略, pārs'vaの転訛したもの, ジャイナ教の第23祖 (ティールタンカラ) にあたる。(1)

〔3〕 Supāsa—Supārs'vanāthaが略され転訛した語で, 同じくジャイナ教の第7祖である(1)

〔4〕 Barunā, Asī—Barunā (varunā) とAsīとの両川はバナーラス近くでガンジス川に合流する。(2)

〔5〕 Madhya des'a ki boli—Madhya des'aの意は, マヌの法典(2—21)に用いられているところでは, ヒマラヤ山脈, ヴィンディヤ山脈, パンジャブのサル・ヒンド地方及びウッタル・プラデーシュのアラーハバードを結んだ線で囲まれる地域であるが, より狭義にはガンジス川とヤムナー川とはさまれる地域をさすことがある。ここでは, このArdha Kathā (Kathānaka) が書かれている言葉が共通語として使用されていた地域を Madhya Des'a として考えねばならないが, BD は “Samayasāra Nātaka” を Bhāsā に翻訳した, と述べている (638) ので, 今日いうところのヒンディー語地域をそれに相当するものと考えればよいのであろう。(7)

(6) pahiri mālā mantra ki—ここでいう mantra とは Namokāra Mantra と呼ばれるもので, ジャイナ教でいう pañca namaskāra (5種の帰命) の祈りの句である。すなわち, Arhat, Siddha, Ācārya, Upādhyāya, Sādhu-Samudāya の5種の聖者に帰命するとの意をもつ。句全体としては, 「ナモーカーラ・マントラの念珠を身につけた」ということで, ジャイナ教徒になったことを示す。(10)

〔7〕 thāpyau gota biholiā biholi rakhapāla—biholi とは Rohtak (現今, ハリヤーナー州内) から約70マイル, pānīpatの近く, ヤムナー川岸にある村名 (NP 註による)。ラージプートであった一族が, 一族あげてジャイナ教徒になり, got(a)=gotra すなわち, 族内結婚をするカースト (Kula, ここでは S'rimāla Kula) 内にできた族外結婚をするグループとして, 元ビーホーリー村のラージプート (Rakha-pāla=Raksapāla) がビーホーリー・ゴート (ゴートラ) というゴートラを興した, というわけである。このことから, ゴートラ名が地名に由ったこともあるのが判明する。なお, 今日, カースト (副カースト) を意味する語としては, jāti あるいは, jāt という語が用いられており, Kula は一般に「家系・家柄」の意に (ヒンディー) 用いられる。しかし, 地名に発する S'rimāl(a) という姓を名乗る者の中にはヒンドゥー教徒もジャイナ教徒もいるわけなので, Kula はここでは同姓のジャイナ教徒を他から区別する標識になる。(10)

〔8〕 Hindugi/ Hindagi/, Pārsi/ Phārsi/—Hindugi という語はここでは当時の用法からして Hindi, Hindui, あるいは, Hindawi と同義に用いられているようである。parhyau とあり, 次のペルシア語と並んでいることから Madhya Des'a の標準的な言葉の意になろう。家庭や小地域で使われる言葉ではない, もっと広範囲に使用される言葉をさしていることは確かである。「職業上必要とされた言葉」の意がこめられていると考えて差支えなからう。ペルシア語 (Pārsi) についていえば, インドにおけるイスラム王朝の多くがペルシア語を官廷語・公用語としたので, イスラム教徒のほか, ヒンドゥー教徒やジャイナ教徒などにも職業柄, あるいは教養としてその習得が必要となった。Mūladāsa の場合, 職業上の必要からと考えられる。だれにどこで習ったとは記されていないが, P. N. Chopraによれば, 最初イスラム教系の教育機関に行きながらなかったヒンドゥー教徒も後にはこのような必要に迫られてそこへ通うようになった, という。(Society & Culture in Mughal Age, Agra, 1955, p. 129) (13)

〔9〕 Mugal(a)—もちろん本来は Mugal (Mugul) 人のことであるが, AK ではムガル朝の役人の意味に用いられている。(14)

〔10〕 Modi—Modi とは普通, 穀物を主として扱う食料品商のことをいう。この場合も, (16) の記述からすればこの意味に受け取れるが, (22) の記述からは官職かとも考えられる。もちろん, AK の随所に記されている為政者の専横が許されていた時代であるから断定はできない。(14)

〔11〕 Sāhi/Syāha/Himāūとはムガル朝のHumāyūn王(Shāh)(1530—56)である。NPはA本(Bholes'vara 寺本)の傍註にbara biraとはUmrāoの意なり、との記載のあることを伝えているが、bira bara, すなわち, viravaraと解すべきかと思われる。(15)

〔12〕 ucāpati/ucāyata/—NPはMadhya Pradesh' のサーガル地方では今日でも使用されている語であるとしているが、ここでは標準形としてMPのucāyata(仮勘定)をとる。(16)

〔13〕 muhara—chāpa ghara/kara/khālasai kinau linau māla—KhālasaiとはKhālisahのことで、原義としては「御料及び御料地」であるが、ここではムガル朝時代、官職にあった者が死去すると、その財産は領主(皇帝)の没収するところとなったことに言及していると思われる。したがって、ここではgharaよりもkaraをとるべきかと考えられる。「官職」については(14)のModiの項で言及した。なお、Khālisahについては、J. Sarkar, Mughal Administration, p. 140—160, Calcutta, 1952を参照のこと(22)

〔14〕 Jaunapura—今日のジョウンプル(Jaunpur)のことで、U・P東部、バナーラスの北方にある。(24)

〔15〕 Jaunāsāha—Jaunpurはデリーのトゥグルク朝の第3代Firoz Shāh Tugluq(1351—88)が第2代のMuhammad bin Tugluq(1325—51)の俗称Jauna Khānに因んで、1359年、ベンガル遠征の際、建設したとされることに言及している。(26)

〔16〕 Chattisa pauni/pauna/—pauniとかpauna,あるいはpauniyāなどと呼ばれるものは、本来、村落共同体の中において土地生産に従事せず、一定の技術労働を提供し、その代償として農産物の収穫のうちから定まった額の分け前を受け取り、村民の祝いごとに際しては金品が与えられるカーストをさす。ただし、ここで数えられている36のものは、そのほとんどが職人に相当する。また、Sisagara(ガラス職人), Darji(仕立屋), Sangatarāsa(石工)などのように名称そのものからしてペルシア語・アラビア語由来のものまで含まれている。(28)

〔17〕 anukrama bhae tahā nava sāhi—(26)でふれたJaunpurにはKhwāja Jahān Sarwarが1393年にSharqi朝を興し、デリーの支配権から独立する。ついで、Qaranful, Mubārak Shāh(1399—1402), Ibrāhim Shāh Sharqi(1402—36)の統治を経て、Mahmūd Shāh(1403—57), Muhammad Shāh(1457—58)に至る。そしてHusain Shāh(1458—1479)がデリーのローディー朝Bahlūl Lodī(1451—89)と争い、敗れた。Bahlūlはその子BārbakをJaunpurに任じた。これに対して、BDの数える9代の王とは、①Jaunāshāh, ②Bawakkar Shāh, ③Surahar Sultān, ④Dosa Muhammad, ⑤Shāh Nizām, ⑥Ibrāhim Shāh, ⑦Shāh Husain, ⑧Gāji, ⑨Shāh Bakhyā Sultānとなっており、BDもことわっている通り(37)、聞き伝えによるためにこのような差が現われたものと考えられる。(32)

〔18〕 Itāwā—UPのカーンプルとアーグラとの中間に位置するジャムナー川沿いの都市。(35)

〔19〕 Catasāla—pāthas'ālāと同義、すなわち、初等学校・寺小屋ほどの意に用いられている。普通、パンディットが教え、ヒンドゥー教徒の子弟が通ったものをpāthas'ālāと呼び、Maulaviが教え、イスラム教徒の子弟が通ったものをMaktabと呼んだ。なお、息子のBDも父親と同じく8歳になると学校へ通いはじめた、(98)としている。(46)

〔20〕 Sulemāna sultatāna pathāna—ベンガル地方の13世紀初頭より1576年のアクバルによる征服に到るまでの統治者の年代についてはあまり詳細が知られていないが、アクバルによる征服直前のものはアフガン族のものであった。ここに言及されされているSulemān(a)はpathān(a)とあるところからも、スール朝の南部ビハールの知事であったSulaimān Karakarani(—1572)ではないかと考えられる。彼はスール朝の'Adil Shāhの死後、ベンガルにまで勢力を拡張した、とされている。R. C. Majumdar ed., An Advanced History of India, London, 1963, p.452 (48)

〔21〕 potadāra—正しくはFotdārで、ペルシア語からの借入語である。現在ではこれをpoddārと訛り、姓名のように用いている。ムガル朝における徴税制度の中で、財政官(Diwān), 徴税官(Karori)に次ぐ役職である。その配下にKārkunを従えて徴税に従事した。ここでは、人数の正確さはともかく、

ジャイナ教徒が多数、同じ職に従事していたのは、原文にもある通りダンナーラーエという同教徒の上司がいたためと思われる。宗教上の紐帯が職場の開拓につながっている点、また、ジャイナ教徒がイスラム教徒の支配下で経済的に進出する一つの機会に触れている点で興味深い。(50)

〔22〕phārakati—正しくはfārig khaṭṭ (弁済証書) のことである。(51)

〔23〕posaha—parikaunā—(posadha, pausadha) とはジャイナ教の在俗信徒が定期的になすべき務めの一である。(587) の3の③に含まれる。parikaunā (pratikramana) とは出家、在家を問わず、毎朝夕、行なうべき六種の 勤行 (Āvas'yaka) の一つで、自己の過誤を反省、悔悟すること。(51)

〔24〕Sametasikhari—(57) 現在のビハール州の東部、西ベンガル州境にある parasanath Hills のこと。ジャイナ教徒の聖地。(57)

〔25〕Sangha calāyau—(57) のSameta sikhariへの巡礼にふれているのであるが、ここで用いられているSanghaという語は、Yātrā—Sangha「巡礼講」ほどの意に用いられている。これは後述のHirānandaの例(227)にも見られるように、富豪・豪商らが中心となって一行を募り、それに財政的な接助をできるだけ与えたもののようである。そうすることが功德の一つと考えられたのである。また、それを実施するに際しては、権力者の通行許可が不可欠であったようである。(58)

〔26〕Sāmāika—これは(51)で述べた勤行Āvas'yakaと同じく、毎日の勤行であって俗界の執着を去り、平等心を養うためのものである。(59)

〔27〕caubihāra—N Pの註には夜間における飲食の禁、とあるが、明瞭ではない。(60)

〔28〕panca navakāra—(10)の5種の帰命に同じ。(60)

〔29〕ūbaṭa pantha/umata pantha/—M Pはūmataと読むが、Hindī的ūbar—khābarの意のūbaṭaをとるべきであろう。(64)

〔30〕Sarāphī—Sarrāfの仕事のことである。もともと、Sarrāfとは貨幣の検認、計量などによって貨幣の管理関係の作業に従事したことをさしたが、後には両替商、金融業、貴金属商などにも従事するようになった。(67)

〔31〕Merathipura—デリーの北東65kmにあるU P北西部の都市。(68)のRohtak((g))〔(10)の註参照〕の距離は約120kmで、さほど遠くはないことに注意。(69)

〔32〕Sati ki Jāta—(79)にSati aūta とあるので、両親がSati aūta 詣に行ったことをさす。Sati aūta (aputra, aputrā((skt)), aputta((paia sadda Mahannao)))は、Rohtak((g))のaūta (子なし) 貞女を神格化して祀った祠。ここでは子を授かるようにとの祈願に出かけたこと。〔(79)参照〕(78) (79) (83) (136) (137) これはまた、B Dが生まれた後、パールシュヴァナータ詣に行った際の様子からも幼児の養育の困難さや子孫を希求する願望のはげしさを示すものと解してよからう。しかし、B Dにとっては、そうしたことはすべて嘲笑の対象でしかなく(80)、現世に生起してくることはすべて前世での業果(pūraḥ karama udai sanjoga)でしかなかった(95)。

〔33〕prabhu parasa—jinavara kau jaccha—各ティールタンカラにはそれぞれに仕えるヤクシャ(Yaksa)が想定されている。(90)

〔34〕Khairābād(a)—U・PのSitāpur Zilāにあり、Lakhnauから約65km (101)

〔35〕purohita—kula-purohita、すなわち、壇家の儀式を司る僧のことだが、ここではNāu (床屋)を従え、娘(嫁)の親からの手紙をたずさえてきて手渡し、婚約(sagāi)をかかわしたことになる。(102, 103) もっとも、この前の段取りがあったと考えられるが、ここでは言及されていないので不明である。(102)

〔36〕Nāu—ジャイナ教徒の場合もヒンドゥー教徒の場合と同じく床屋は縁結びや結婚式での世話役としていろいろ重要な役割を果たしていることがわかる。(102)

〔37〕Tilaka—カーストや宗派等を示す標識としてせんだんなどをすりつぶしたものを額につけるが、ここにあるように祝儀や行事などに際してもつける。(103)

〔38〕paryau trepanē kāla—Vikrama 紀元の1653年、すなわち、1596～7 A Dに飢饉が発生し、物価騰

貴のため穀物が得難く、世間が苦しんだ旨を記しているが、Akbar Nāma (Ⅲ—727)などに言及されている干魃による飢饉をさすものと考えられる。(104)

〔39〕So le calyau—この結婚はすでに (105)において「結婚」という言葉が用いられているのだが、明らかに幼児婚なので、同棲するのはさらに後のことになる。ここではB Dのしゅうとの兄弟が拳式後来していたB Dの妻を実家へ連れて帰ることをさしている。そして、同棲までにはなお曲折がある。

(109) 〔(193)及び(198)参照。〕

〔40〕purahākima nauwāba kilica—Akbar NamaにQulij khān の名で言及されている將軍、アクバル並びにジャハーンギールに仕える。Akbar Nama Ⅲ—720 (p. 1076, transl. by Beveridge, calcutta)には4,500のマンサブダールに任じられた、とある。その他、同じくⅢのp. 1133, 1140, 1250, 1256 など参照。(110)

〔41〕Sāhijādapura—アラーハーバード・ジラーのガンジス川沿いにある。(116)

〔42〕Bhoga—antarai—ジャイナ教における「業」の区分の一。antarāya karmaの一で、bhoga—antarāyaと呼ばれる。そのために享くべき樂 (bhoga) が妨げられる、とされる。(118)

(43) Ilāhābāsa—現在のアラーハーバード (Ilāhābād) のことであるが、ペルシア語の -ābād をサンスクリットの -āvās(a) (居住地) で置きかえたものか。(133)

〔44〕tahā dāni vasudhā-purahūta—dāniとはDāniyal Shāh, すなわち、アクバル王の第三王子のことである。1605年3月に33歳6ヶ月で亡くなった、とAkbar Nama (Ⅲ, p. 1254) に記されているが、アラーハーバードには1596年に任ぜられていた。Vasudhā purahūtaとは地上の(人間界の)インドラ神ほどの意。ここではアクバル王への讃辞であるが、アクバルの訃報に接した際の様子やJagabanda (Jagavandya) akbara (149) という言葉からもこのような表現がとりたてて大げさなものであるとはいえないだろう。(133)

〔45〕phatepura—アラーハーバードの北西約130km, ガンジス川とヤムナー川とにはさまれた地域にある都市。(139)

〔46〕Osawāla—ラージャスターンのジョードプル近くのOs(a)という地名に由来する商人カースト名。(141)

〔47〕Adhyātama jāna—adhyātamaとはadhyātmaのことで、「真知」,あるいは、「真理」ほどの意である。jānaはskt.のyāna, すなわち、「乗」の意。ここでB Dが用いているのはadhyātma mata「真知・真理の教説」のことである。NPによるとAdhyātma Mataは次のように説明される。アクバル王の頃,あるいは,それ以前よりジャイナ教の根元を追究しようとする一団の人々が北中部インド(アーングラ?)に現われた。その人たちは女性の解脱とか, Kevalinの食・不食, 裸行など, 白衣派と空衣派との間で論争点・対立点となっていることには一切ふれず, 出家・行者(yati, Bhattāraka)の形式主義によってかくされているジャイナ教の根本義(Adhyātma)を把握しようとしたものである。そのため白衣派からはAdhyātma Mata, 空衣派からはTerā Panthと蔑視された。この派の中心人物として, B Dも数えられているが, この派そのものはB Dが参加する以前から存在していたことはこの句からも明らかである。B Dは白衣派に生まれ, 最初師事したBhānucandra師も白衣派Kharatara分派(Gaccha)に属する人であった。カイラーバードで知己となったArthamalaḥjī DhoraなるAdhyātma派の人からは空衣派のAmrita Candra (10世紀前半)がKundakundaの“Samayasārapāhura”に註を加えた“Samayasāra prabhābhṛta”の重註を読むようにと与えられたり, 後に彼がAdhyātmaの真義を悟るに至ったきっかけは, Rūpacandraという空衣派の師にこれも同じく空衣派のNemicandra (10~11世紀)の“Gommatasāra”の解説, あるいは, 教説を耳にしてからであった。しかし, このAdhyātma派には空衣・白衣の両派から傾倒者が現われた。〔NP, AK. P. 33—56参照〕(141)

〔48〕Sāhi Salema—Salim, すなわち, 後のJahāngīr王 (1605—27)。(149)

〔49〕ākhetaka kolhūbana kāja—これはNPによるが, MPではāthau tūka (?) kola bana kājaとなっており, いずれにしても意味は不明確である。(150)

〔50〕Laghu kilica nūrama sulatāna—MPではLaghu kalāla jhammū sulatānaとなっているが、Akbar NamaのNūran Qulija名で現われている人物と思われる。1605年のこととして“The charge of Jaunpur was made over to him((Nuran Qulij))”とある。〔Akbar Nama III, P.1256〕

〔51〕Tāhi hukama akabara kau bhayau—Salīm王子がAkbar王に反抗して、Jaunpurを勝手にジャーギール（賜与地）として与えたのをAkbarが認めなかったことから生じた混乱。1599—1600年のことであるが、Salimの反抗はこの前年頃から目立つようになり、アーグラを占拠しそこなったが、Jaunpur以外にも Kālpi や Bihār においても同様のことをしている。〔A.B.Pandey, Later Medieval India, Allahabad, 1963, p.261など参照〕 (151)

〔52〕Lālā bega—Tuzuk-i-Jahangiri やAkbar Namaに Bāz Bahādurの称号で現われる人物、Tuzuk-i-JahangiriによればLāla Begであるが、これと同一人物か。〔The Tuzuk-i-Jahangiri, transl. by Rogers, 2nd ed. 1968, P.21〕 (165)

〔53〕Paṇḍita Devadatta—14歳になったのでDevadatta師について学んだ、とあるが、(169)にあげられている書物や学問はサンスクリット語や占星学、修辞学といったものであり、宗教色の強いものであるとはいえない。おそらく「高い」教養を身につけるために師事したのであろう。ここに“Laghu Koka”とあるのはKokokaの性愛学書“Rati Rahasya”の抄本と考えられる。また、(176)でふれられている韻律学書“s’rutabodha”などを含めての教養がBDの「詩人」としての活躍の支えをなしたものと思われる。(168)

〔54〕Nāmamālā—空衣派のジャイナ教徒のDhananjayaが1123—40年の間に著わしたとされるサンスクリットの辞典。(169)

〔55〕Anekārtha—Anekārthaの意で、MaṅkhaのAnekārtha Kos’a(1150年頃)、あるいは、Hemacandraの“Anekārtha Sangraha”などが考えられるが、NPは上の“Nāmamālā”と同じ著者の筆になる“Anekārtha Nighaṇṭu”とする。(169)

〔56〕Kharatara abhaidharama ubajhāi—KharataraとはKharatara-gaccha（ジャイナ教白衣派の中の一分派）のことで、ubajhāiとは導師(skt. upādhyāya)のこと。BDはこの時、アバヤダルマ師に従ってきたBhānucandra師から親しく教養を受けることになる。(173)

〔57〕Jati—Yati (Skt), Jai (Paia)のことであるが、白衣派のSādhuの意、ないしは在家に対して出家の意に用いられている。なお、Schubring; The Doctrines of the Jains, p.71—2参照。(174)

〔58〕Posāla—Posahaと呼ばれる戒行のための部屋・建物posaha-sālaと考えられるが、NPはpausāla, upāshraya, upāsarāとも呼び、sādhuの宿泊所としている。(175)

〔59〕Muni—(10)のSādhuと同義。(176)

〔60〕Guna ātha—Siddhaiに備わっているとされる八種の徳をさしていると思われる。(177)

〔61〕Calc pāujā karana kau—Pāujā [Pravrajyā((Skt)), Pauvajjā((paia))]は、(105)～(109)のbibāhaの実際が仮祝言であったのに対し、本祝言に行くことをさしている。(182)

〔62〕Bāta kau roga—Vāta-rogaなどと呼ばれるもので普通、リュウマチス、痛風など、インド医術で体質構成要素の不均衡より生ずると考えられている病気の意に用いられている。しかし、NPはここに記されている症状やその後生まれたBDの9人の子供がすべて生後間もなく死亡していること、(195)において父親から痛罵を浴びせられていることなどから、(170)以下でふれられていることと関連してこの病気を梅毒と断定している。〔Ardha Kathānaka, xxviii〕 (184)

〔63〕Sannyāsi—本来、いわゆる四住期の最後のSanyāsa（隠遁期）に入った人のことをさしたが、苦行者、あるいは、乞食者のことも言うようになったが、さらにここにあるように宗教的な動機よりも生活のため乞食そのものを目的とする者にも用いられるようになった。その意味でSādhuと同義語になっている。(209)

〔64〕Jogī—Yogī、本来はヨーガの行に通じた人などの意に用いられる語であるが、(209)のSannyāsiと同じような意味に用いられることもある。(219)

〔65〕Sadās'iva mūrati—ジャイナ教徒でありながら、天国を得ようと (Pāvai siva geḥa) ほら貝をシヴァ神像として日夜拝むようになったことをさしているが、インド人一般の日常生活における宗教の意味を考える上で興味深い。(219) (220)

〔66〕Hirānanda Mukima—アラハバードにおいてサリーム王子と親交のあったジャイナ教徒の豪商。ラージャスターンのマールワール出身でHiranand Sāhuの代に Patnāへ移住したといわれ、その子MānikcandはベンガルのMurshidābādの近くへ移り、Aurangzeb王から Jagat Seth の称号を授けられた。(Kalikinkar Datta, Survey of India's Social life and Economic Condition in the Eighteenth Century 1703—1813, calcutta, 1961, p. 172) (224)

〔67〕purajana loga bhae bhayabhita— (252) ~ (256) の記述から、アクバルの死後、後継者争いによる混乱や無秩序状態の出現を懸念して不安になり、貧富貴賤の見分けのつかないように変装したり、貴重品を地中に埋めたりしたものと考えるべきであろう。(247)

〔68〕pādālipura—N P は patnā ではないかと考えている。(279)

〔69〕Karori—本来の意味は (50) の註において述べたものであり、1 千万ダーム、すなわち、25 万ルピーの金額を徴収する役職をさしたのであるが、後には市場の監督・徴税の任に当たった者にも用いられている。(322)

〔70〕Madhumālāti, Miragāvatī—Madhumālāti 及び Mrgāvatī いずれもヒンディー文学史の中でスーフィー(Sūfi)恋愛詩の名をもって知られる作品で、作者は前者がManjhan, 後者がKutbanとされる。主題となっているのはイスラム教神秘主義であるが、民間に親しまれていた物語や伝説をその衣裳に借り、民衆の言葉で詠まれたために、ここに述べられているように文字の読めない人たちにまで親しまれた。前者の成立は1545年、後者の成立は1503年といわれるが、正確なところは不明である。言及されていることに限って考えるならば、宗教的なものとしてではなく、娯楽的なものとして扱われていることは確かである。(335)

〔71〕Khovai dāma amala bahu khāi—amala にはアルコール類と麻薬との両方の意味がある。当時は社会階層・身分に関係なく、阿片や大麻がかなり吸飲されていたようであるので、後者の意にとっても支障はないものと思う。〔なお、P.N.Chopra, Society & Culture in Mughal Age, Agra, 1955, p. 46—47, など参照〕(353)

〔72〕Kaula—Kaul(a) ないしは Kol(a) というが、現在の Aligarh の古名。(396)

〔73〕Pirojābāda—Firozābād のこと、アーグラからヤムナー川を越え、東方に約40KM。(410)

〔74〕Siloka (418), Janeū (421)—盗賊たちの部落に迷いこんだために危害の加えられるのを恐れ、自分たちはブラーフマンになりすまして難を逃れようとしたわけである。そのため、学識のあったBD がサンスクリットの頌句 (Siloka, S'loka) を唱えたり、着用していた衣服から糸を引き抜き、ブラーフマンが身につける木綿の聖紐 (Janeū) をこしらえたりしたわけである。

〔75〕Nāriara—めでたい品として結婚式に使用されるココヤシの実、ここでは嫁のほうから結納品の一部として用いられている。(442)

〔76〕Sirapāu—Sar-o-pā のこと。Khil'at と同義で、ムガル朝において皇帝、その他の高官がその麾下に賞与として下賜した衣服 (など) のことである。年2回、定期的に与えられたほか、祝典や謁見、昇進、任官の際にも与えられた。ここでは恐らく拝謁の際に与えられたものであろう。(448)

〔77〕Raunāhi/ Saināi/, Dharmanātha—Dharmanātha はジャイナ教第十五代の救世者 (ライールタンカラ) のことであり、raunāhi は Dharmanātha の誕生地 Ratnāpuri (Ayodhya の近く) のこと。(465)

〔78〕Gharanāi/ ghanāi/—大きな水がめを竹や木材などでこしらえた枠につないでこしらえた「かめいかだ」のことと思われるので、NP のほうを採るべきであろう。(471)

〔79〕Ghātāmapura, Korā—前者は今日の Kānpur の南方約40KMにある。後者は前者の東方約20KMにある Korā と思われる。(502)